

「文学」

スパイ都市としての上海表象
—アン・リーの『ラスト・コーション』をめぐって—

名古屋大学 陳悦

近代都市上海（1842－1949）という文化表象は映画、小説、ドラマといったさまざまな表現形式で大衆に伝えられている。本発表は、台湾の映画監督であるアン・リー（Ang Lee）によって製作された『ラスト・コーション』（「色・戒」、2007）を取り上げて、そこで表象された老上海（Old Shanghai）が映画のスパイ主題といかに関わっているのかを考察するものである。

『ラスト・コーション』は、簡単に言えば、日本軍に支配された「孤島」時期の上海において、ハニートラップで汪兆銘政府情報機関高官（言わば「漢奸」）暗殺を企てるが未遂に終わるといふ物語である。この映画は、1940年の魔都上海を彩る事件、即ち女スパイ鄭蘋如（テイ・ピンルー）による汪兆銘政府の特務機関のトップである丁默邨を暗殺未遂事件という歴史的事実をモチーフにして作られた作品である。

先行研究として、李欧梵は本作における老上海表象に触れ、上海イメージとフィルム・ノワールというジャンルとを結び付けて論じた。また、戴錦華は、『ラスト・コーション』は映画の実質、即ちスパイ映画（冷戦映画タイプに属する）として、物語の流れによって、役柄の身分の曖昧さと別人に扮する行為という特徴がポスト冷戦時代にも流行る一つの原因だろうと述べていた。しかしながら、スパイ都市としての上海表象は具体的にどのように映像で描かれたのかについては、従来の研究では十分に検討されてこなかった。

『ラスト・コーション』では、ヒロインであるワンのスパイ活動の展開が、上海の都市建築という空間表象を通じて描かれている。換言すればヒロインを取り巻く空間としての老上海の風物には、政治的意味と権力が付与され、それらは単に物語の背景に留まらず、スパイ映画という主題を醸し出すという一つの役割を担っていると考えられる。本研究の手法としては、映画の具体的なシーンを挙げ、暗殺場所の宝石店、漢奸としてのイー氏が日本人と会う場所である日本料亭、ワンと組織の連絡場所である路地の古本屋といった空間表象が、映画のなかでどのように描かれたかを、映像分析の方法で考察する。それらは「漢奸」暗殺計画というプロットと緊密に融合し、スパイ活動にまつわる主人公の立場の転換を鮮やかに反映している。カメラワークに仕掛けられた視線のポリティクスが、表象される老上海の空間に如何に政治、権力という要素を付加しているかを究明していきたい。